

#### 4. 解説：リスクとレジリエンス

東日本大震災後に、「強靱性」という和訳で一般社会に知られ始めた「resilience」は、語源的には、ラテン語 *resilire* [英 rebound] (元の形や位置に戻る力、能力)とされる。1839年の文献には困難な状況から回復する能力(精神力)として使われた例がある。ペリー提督に随行して日本に来ていたアメリカ人が1857年に書いた文献に、安政東海地震(1854)に被災した下田の街が復旧していく様子に対して「resiliency」という表現が用いられていることが紹介されている。

力学の分野で「resilience」が最初に用いられたのが1858年。心理学では1950年代から使われ始め、1980年代後半から多用され、1990年代から社会学や生態学などで用いられ始めた。防災学の分野では、国連国際防災戦略事務局(UNISDR)が2009年にこの分野における「レジリエンス」を定義した。そして、2013年に世界経済フォーラムから発表された「Global Risks 2013」において、「Building National Resilience to Global Risks」と称して、国際的な競争力と危機管理能力(レジリエンス)の関係性が示され、危機管理能力の高い国は国際的競争力が高いことが示され、これをきっかけに、ビジネスや行政の分野でも「レジリエンス」という用語が使われるようになった。

出典：第54回「レジリエンス」の語源を探る旅 (合同)Office SRC/代表 田代 邦幸 リスク対策  
<https://tinyurl.com/273pbygv>、ビジネスレジリエンスの実現 ISO22320を踏まえた組織の危機対応力向上に向けて、KPMG、2016-05-20 <https://tinyurl.com/2y9a3j7d> 他

かように、レジリエンスは様々な分野で使われているが、そこに共通する意味合いは、「思い掛けない又は予見し難い変化や混乱に順応・対応し、最小限の機能を維持するとともに、迅速に回復する能力」である。要するに、「レジリエンスとは、自身の自律的な力により環境の変化に柔軟に適応し、悪い状態から回復する能力」(参考：適応力高める制度設計を コロナが示した医療の課題 伊藤由希子・津田塾大学教授 日経新聞 経済教室 2021年7月6日 <https://s.nikkei.com/3y2AIWN>)と云えるが、一言での和訳として何が適切か。ここでは、事前の「対応力」と事後の「復旧力」を包含する意味としての「適応力」(芝原靖典定義)を提唱したい。そして、リスク(Risk)は、レジリエンスと逆相関の関係にある。

レジリエンス = 対応力(事前) + 復旧力(事後) = 適応力

$$\text{Risk} = \frac{\text{Riskの起きる可能性} \times \text{影響度}}{\text{Riskへの適応力(レジリエンス)}}$$

自然環境、技術環境、社会環境の変化により、政策/計画/Projectの想定環境[前提条件]を超えた事態(Risk)の発生が頻発し常態化している現在及び今後において、何が起ころうとも、何とか適応して持ちこたえること(レジリエンス)が極めて重要になってきている。そのためには、系(システム)全体が致命傷を負わない(イールドポイント yield point を超えない)ように、平時の段階でどれだけ多様性・分散化・冗長性の確保が問われる。目先の「経済効率」を超えた評価基準に基づく「リスク&レジリエンスマネジメント」の確立・実装が急がれている。